

印度靈知學會理事メンマハツ氏著

日本

川上貞信譯

愛理者の殷鑑

京都

菊秀堂發行

「啼血ていけつ一声、客夢を掠かすめ去り、夜色沈々ちんちん、客、恨みを促し来る。満空の熱血、これを注ぐに所なく、病窓鬱々うつうつ、空しく孤月に対す」

『血を吐くように叫んでも、客人の夢は届かない。寝静まった夜、客人の胸に悔しさが増してくる。大空に溢れんばかりの情熱、これをどこに注いだらいいのか。気分が滅入って病窓からは見る月も空しく感じる』

——これ、はるか遠方より来日したる病床の客人、ダルマパーラ氏の惨況なり。

氏はセント・トーマス校の卒業生で、キリスト教主義の教育を受けたのであるが、真理を愛する氏の凛々りんりしく勇ましい性質は幼少の時より備わり、邪教の徒、ついにこれを退けることはできなかつた。ことに、氏の母君は熱心な仏教信者にして、家庭における教育により、よくこの熱心なる愛理者（真

理を愛する人）を養育されました。氏が初めてオルコット大佐に会ったのは十四歳の時で、以来、年を重ね、學術の進歩と思想の發達とに従い、眞理を愛し、仏教を護ろうとする精神はますます固く、自らを称してダルマパーラ（護法）と名づけ、ついにオルコット大佐と共に、仏法の為には命を惜しまず、仏教を保護し広めることを誓ったのであります。当年二十四歳にして、目下セイロン靈智学会本部の理事をしています。

しかし悲しいかな、氏は万里の道も遠からず、氣候の寒熱も顧みず、日本の仏教を視察し、親しく日本仏教徒に接し、堅く親交を結んで、長年の宿望を達しようとしていましたが、オルコット大佐と共に来日されるとたちまち、リュウマチの為に苦しめられる所となりました。京都府立病院にあって、病床で苦しみもがくこと、まさに二ヶ月になろうとしています。

氏はいつも言っておられます。

「わたしはこの日本帝国に来てから、不幸にもこのような難病に苦しめられました。もし、この病魔のために自分の命を失うようなことになれば、故国の父母は深くこれを悲しむでしょう。故国の兄弟は深くこれを嘆くことでしょう。故国の親友は深くこれを憂うことでしょう。しかし、わたしはこの盛大なる仏教国に來ることが出来ました。わたしの心は大いに満足しています。生死は、あえてわたしが憂う所ではありません」

しかし今や、氏の病気が少しばかり快方に向かってきたようなので、まだ文筆に従事することは難しいとはいえ、真理を愛し、日本仏教徒を慕い、邪教を憎む熱血が止むことはないのです。筆は舌に代わり、墨は涙に代わり、満身の熱血を注いで、世の諸兄弟姉に忠告しなければいけないことがあるのです。

私（川上貞信）は常に、氏のお側にあつて、不肖を顧みず、氏の原文を訳述して、これを公おおよけにしようと思ひます。ダルマパーラ氏の意味をしつかりと伝えることが出来ないとなれば、文章が拙劣せつれつなる私の罪であります。請ひ願わくば、賢明なる世の諸兄姉よ、いささかの注意を加え、もつてダルマパーラ氏の意味を推読していただければ、何よりの幸せであります。

明治二十二年四月五日

訳者識

愛理者之殷鑑

愛理者之殷鑑

いんかん

(真理を愛する者からの忠告) 『現代語訳』

靈智学会理事 ダンマパラ氏述

日本 川上貞信訳

仏陀の教えを信奉する我が親愛なる日本の同胞の皆さん、私は我が本国の
実情、及び私たちと皆さん方が共に信奉する宗教の教えに関して、あなた方
に少しばかり忠告をしたいと思えます。私はこの善き日本の国に来て親しく
皆さんとお会いし、とても親愛な気持ちで仏教の現状を明らかにする事を希
望しています。あなた方と同教の仏教国であるセイロン島のシンハラ族の者
は、日本での仏教の衰退、また日本国内にキリスト教が蔓延しているという

愛理者之殷鑑

のを聞き、実に心頭を悩ませております。二年半ほど前に私はイギリスの雜誌で、キリスト教の宣教師が日本人をキリスト教に改宗させようとしている事を知り、とても心配しています。キリスト教や西洋の文化が、我が国に対して為せる所を知り、私はキリスト教の宣教師等が布教している宗教に関して、あなた方にひと言、忠告をしなければならぬと感じています。と言うわけで、私は直ちに日本の高僧に書簡を送ってキリスト教の恐るべき影響に關して、私の思いを伝えさせてもらいました。釈尊の為に、このセイロン島は神聖な地になりました。実に釈尊は、涅槃に入るまでに三度もこのセイロンの島々を来訪なさったのです。このセイロン島は常に仏教国でした。また将来も決して、その状況に変わりはないでしょう。まさに仏陀の教えが根付いているからです。とは言え、現在の状況は実に慘憺さんたんであると言わざるを得ません。なぜかと言え、かの野蛮なキリスト教の者どもに蹂躪されたのが

愛理者之殷鑑

その理由です。キリスト教の宣教師が来る前は、我が国は罪を犯すような者は少なく、いや、ほとんど居ませんでした。さらに、動物の肉を食べ、酒を飲み、それを文明の開化などと誇称しているキリスト教国のすることは、我が国民の思いも寄らぬ所でした。今から三六九年前に初めてポルトガル人が我が国に来て、我が国の海辺地域を攻撃しました。歴史家の記する所を見ると、ポルトガル人は国内を蹂躪し、村落を焼き払い、寺院を破壊し、人民を殺戮しました。東洋において最も信頼すべきセイロンの歴史書『マハーヴァンサ』を見れば、明らかに彼らは罪深き猛悪な異教者であると言えます。残酷な手段によつて彼らは、二、三のキリスト教信者を得ることは出来ただけでした。ポルトガル人の後にオランダ人がやって来ました。ポルトガル人のような残酷な手段ではなかったけれど、いろんな手段を尽くして改宗者を得ようと思いました。すなわち、仏教者には市民権を与えないという風に――。

こんな方法でキリスト教信者を獲得していったのである。純心で温和な我が国民は名義上とはいえ、ついにキリスト教徒になったのです。オランダ人の後に、イギリス人がやって来ました。その狡猾なる手段によってまた、我が国民を改宗させようとなりました。政府の役人はもちろんキリスト教者であつて、宣教師は大きな力を持つていた。仏教は今から五十年ほど前には、英国ではあまり知られていませんでした。「エクセター・ホール」における宣教師のいい加減な報告と雄弁な演説で、イギリス人は仏教を撲滅するべきであると考えようになった。セイロン島へ来たイギリスの役人は、手を替え品を替え仏教を壊滅させようとし、また、宣教師も大きな力を持つていました。しかし、そんな時でも我が国の国民が思つていたことは「少し目をつむつて我慢すればいいことだ」と。そして多くの仏教信者は役人に好かれようとしてキリスト教に改宗したのです。しかし、「雲に銀裏あり（たとえ暗雲でも反対

愛理者之殷鑑

側には太陽が照って銀色に光っている／どんなに悪い出来事でも必ず希望はある」真理の太陽は、夜明けを告げて暗闇の世界を照らすこと間違いない。私はマックス・ミュラー（1823～1900）やウヅヘーヌ・ゴホルヌフ（1801～1852）などの有名な東洋学者の業績に感謝せずには居られない。なぜなら彼らの研究によって仏教の宝珠がついに、その光を放って人々の前に現れてきたからである。今から三、四十年前なら、キリスト教は欧米諸国に絶大な勢力を持っていたので、先に述べた有名な学者達もまた、世間の伝統的、かつ絶対的な權威によって偏見の目で見えていたのである。しかし、だんだんとイギリスの学者は、仏教は棄てるべき宗教なんかではないことを知るようになった。そして仏教に関する書籍を宣教師自身もまた、出版するようになったのである。仏教経典の翻訳も行われるようになった。しかし、キリスト教の人間が仏教経典を翻訳することは全く道理に合わない。注釈をしたとしても的を得ない

ので、やはり具眼者をあざむくことは出来ない。仏教を研究する学者は次々と現れて、公平に無私の精神でこれを研究する人は、今までキリスト教では説かれていない深遠な哲理が仏教の内に存在するを発見した。しかし、この事はイギリスだけでなく、全欧において興おこれる事実なり。セイロン国の我らは、外国においてこの様な思想の変化が起こっていることを知らず、キリスト教信者がセイロンに在あってしきりに虚を構え、その文化を誇り、酒を飲み、肉を食べて、自ら驕り、それらの飲食が害を及ぼす事を知らない我が国民は、終いには彼らの悪習を真似るようになってしまった。ああ、暗く立ちこめた厚い雲が、ついに太陽を覆い隠してしまったのか。こんなことを天が許すとも言うのか。いや、決してあってはならないことだ。しかし、真理の太陽は清らか光を放ち、積もれる雲を消し去るのである。十四年前のことであるが、私はアメリカのニューヨーク州において、種から芽が出ているのを発見

したのです。その芽はすくすくと成長し、バニヤン樹（菩提樹）のように大きくなりました。この樹こそ神智学会であります。この学会は、西洋諸国に東洋の哲学を注入する会にして、来日して今、諸君と共に居るアメリカ人、オ
ルコット大佐と数年間チベットにおいて仏教の真理を探究した博識なる西洋
のブラバツキー婦人が設立した学会であります。

この真理を愛する二人は九年前、我が国に來ました。仏教がキリスト教より優れている事、そしてキリスト教は道徳を深く害している事などを我が国民に説いて教えてくれました。これが起爆剤となつたのか、先祖伝来の宗教を再認識する事態が起りました。自分の意志ではなく単に政治的な理由から仏教を放棄して改宗した人たちが、再び自分の本心に還って、自らを仏教徒であると明言したのです。キリスト教の弊害、すなわち仏教徒である自分たちの子供をその教敵であるキリスト教の宣教師の手に委ねた弊害を指摘さ

愛理者之殷鑑

れた父母は、その誤りを痛感し目を開いて、かつて自分たちが暗闇をさまよっていた事を知ったのである。靈智学会の支部は国内いたる処に起こり、その指導によって人々は心から大いに興奮したのである。セイロンは全島、まさに活動の真つ直中にあり、この勢いを見れば、彼のオルコット大佐がこのセイロンの為にしようとしている所、特別な思いがある。我が国は二千三百五十九の間、連綿として国王の統治する国であつたが、前王の大臣が愚かだつたせいで、国民は七十余年前にその独立を失つてしまつた。今や、我が祖国はもう滅んでしまつたのではないかと嘆いていた。ああ、我が国の命運を復興する者は果たして誰人ぞや。しかし歴史を見れば、古来から国家の盛衰は無数にあることは慣例である。ああ、私は我が国を愛するために、政治については不満があることは間違いないが、政治は我らの関心を示すものではない。我らの関心は精神的なところにある。この論の初めにおいて、私はヨ

ヨーロッパの文化について論及した。ああ、このおごり高ぶった文化は、実に飲酒、肉食の異名である。ヨーロッパ民族の発展はキリスト教によるものだと、宣教師は或いはあなた方に言うかもしれないが、どうかお願いする。これを信じてはいけない。一千五百年前まではヨーロッパはことごとく暗闇の中にあつた。ジョン・ウイリアム・ドレーバー博士（1811～1882）は二十版も増版されたその優れた著書「宗教と科学の紛争史」において、「ヨーロッパ暗昧あんまいの責めはキリスト教にある」と明言している。欧米の大哲学者はキリスト教信者にあらず。彼等は書を著してキリスト教の非理なる事を指摘したのだ。キリスト教はユダヤ人の為のものであり、イエス・キリストもまた、自らをその教えを、特にユダヤ人の為に話したものであると明言している。しかし私は今、こういった事を詳しく論ずることは遠慮させていただく。それよりも、キリスト教、仏教、両教の道徳をじっくり検証してみようではない

か。キリスト教の道徳は実に不合理である。ヨーロッパ諸国の道徳上の状態は、各国の犯罪統計を見ればよくわかる。私は、貧困と犯罪は、アジア諸国におけるよりも西洋の方がはるかに多いことを知っている。ニューヨーク一州においても九千の酒屋がある。これが即ち、欧州文化の好標準と言うところなのである。

欧米の発展は科学技術の著しい急速な進歩によるものである。しかし科学技術は飲食に関するものではない。北米の有識者はキリスト教では満足せず、さらに高尚で善美な宗教を求めた。高尚で善美な宗教とは他でもない、その力が五大陸を包括して、その原理は極めて単純にして誰でもこれを説き、これを行うことが出来るものでなくてはならない。又、その今まで受けた教えの如何いかんに関わらず、真理をもつて基本とし、真理の他には一切受け入れず。ただ誠意と熱意をもつて求めれば誰でも感得することの出来る真理に基づく

宗教でなくてはならない。これこそ宗教と言うものである。又、これに冠かぶせしむるに一名を以てせざるべからず。我々はこれを仏教と名付けた。と言つても純粹な眞の仏教のことである。大聖ゴータマの仏教の眞髓である。アメリカの科学の最大家ガウス博士は、靈智学会の会員であるが、この方は、「仏教は正しい道理に適える宗教にして、又、仁に至り聖に至る宗教である」と明言している。この言葉はとても重要である。マックス・ミュラー博士は次のように言っている。「仏教の教義は完璧であると思う」教義が高尙でなかったら、決して一国の隆盛をもたらすことはできない。かのローマ帝国は滅びたではないか。それは道徳が衰退した為に滅びたのだ。アドウイン・アーノルド氏（1832～1904）は積尊の生涯を讃えた著書「アジアの光」の序文において次のように書いている。

「この古いにしへの教主ゴータマ仏陀の教えは、目下、ネパール及びセイロンより、遠くは中国、日本に及び、チベット、中央アジア、シベリア、スウェーデン、ラップランド及びインドは明らかにこの広大なる教国に入る。残念ながらその發生の地インドには仏教は残っていないが、ゴータマ仏陀の高大な教えは、近世のバラモン教にその特徴を残し、現在のインド人独特の習俗と信仰とは、明らかに仏陀の教えにその源を發するものである。このように見ていけば、世界の人類の大半は、その道德及び宗教上の思想をこの有名な教主に受けたと言っても過言ではない。実に釈尊の言行は歴史的に見ても、思想中最も高尚で、最も柔和で、最も純聖で、また最も仁愛深きものである。アジアが温和であるのは、実にこの大聖の教えの為なのである。仏教はその内部に、この上なく大きな希望と、無限の仁愛と、また不滅の信心と、大いなる自由を含んでいるのである。」

親愛なる同胞諸君、あなた方の信ずる仏教は、この高遠なる宗教であります。あなた方日本人が順良であり、善美であるのは、仏陀の教えによるものであります。あなた方はキリスト教の中に、満足して受け容れるものを発見することは出来ないでしょう。有識なヨーロッパ人は日本における事態の變化をとて嘆いています。イギリスの大家ローレンス・オリファント氏(1829〜1888)は次のように言っています。「道徳を隠す暗雲が地球を覆い尽くしている。西洋文化の最も盛んなる所は、特に暗雲も濃いものだ。日本はかつて純徳の国であったが、西洋文化に触れて以来、次第に衰退し、今やその道徳はほとんど失われている」と。その虚誕きょたん(でたらめ)を逞たくましくする宣教師はあなた方の服装と宗教とに関して説をしていわく「日本人は直ぐにこれを変えて、西洋のものをを用いるべし」と。こういった内容を教え込まれた日本の新聞記者諸君は喜んでこれを伝え、しまいに根底なき世論を起こさんとし

ている。しかし、仏光新聞の記者は西洋の文化をよく解釈して、次のような皮肉を聞いている。いわく「日本人は駿々として西洋の文化に向かうより他にないだろう。日本人は酒を飲み、悪食を食い、賭博に耽り、牛馬を屠殺し、ウソをつき、盗殺を行い、淫行に走り、道徳上の感覚を失って唯物的な方向かっている」と。このような皮肉、刺言は欧州の文化を称讚している者に痛烈に戒めている。しかし我々は、決して黙っているわけではない。深く之に熱心するものなり。実にこの新聞記者が危惧している日本に流布している毒物は、きれいに除かなければならない。喜ぶべきことに、近頃ある種の氣運が高まり、まさに彼の悪弊の除かんとするや、近いうちに欧州の禽獸的文化を模倣したる猿猴えんこう（浅知恵があつてずるい人）は再び、日本古来の華麗かえに復し、善法に帰るべきである。マックス・ミュラー博士は言語学、文献学の基礎を築いたお方である。又、博識な東洋学者でもある。博士は我らの宗教を

大いに称讚してくれているが、次の一節を読めばよくわかります。マックス・ミユラー博士がギフォード講義の講師の第一人者としてグラスゴーに來られた時、博士は講演の席に招かれてラビッド・ハンター高僧と席を同じくした。その時、高僧の演説に対してマックス・ミユラー博士の言われるには、

「私は新しい宗教を興そうとは思いません。私は古き教えを明らかにして、皆さんに知って欲しいのです。宗教がこの先どのようになるべきかを説こうとは思いません。一つの宗教が今までどのようなであったのかを、説き明かしたいのです。私は自分の持てる力を尽くして宗教の歴史的な研究によつて、その成り立ちの基盤を解明したいのです。私が新しい宗教を説くことを要請されるのは、決して今に始まったことではありません。かつて、優秀な日本の政治家で、ワシントンで公使をしていた人物が日本に帰る途中にイギリスに立ち寄つて、直ぐにオックスフォードに私に面談を求めに

訪ねて来ました。わたしはちやうどその時、食事中だったのですが、公使は私にこんなことを尋ねました。

『あなたは、いろんな宗教を知っておられる。あなたは、私が教育を受けた人間である事は知らないと思うので言っておくが、私には宗教は全く必要ではないのだが、日本の民衆には宗教が必要であると思う。そこで私は今、少し時間を借りてあなたに宗教のことを尋ねたいと思う。どんな宗教を我が国民に教えるべきでしょうか。博士、それはキリスト教である』
などとは言わないで頂きたい。なぜなら、日本におけるキリスト教は大いに政治上の問題に干渉し、キリスト教信者は既に、国家の為に大いに弊害をもたらしているからです。キリスト教ではなく他の宗教で博士が、『これこそ……』というものがあれば教えていただきたい。私は直ちにそれを本国に持ち帰ろうと思うのです』

私はこれに答えて、こう言った。

『日本には善良な宗教があります。それは仏教であります。あなたは先ず、自ら仏教信者とおなりなさい。見せかけの信者ではなく、真誠の仏教の信者とおなりなさい。かの釈尊の教えを守って、その教えを信じなさい。その後、もし又、イギリスに来るようなことがあれば、少しばかり時間を作ってもらって私のところに来て、君の経験を語ってくれる事を心から願う』

このように、欧米の学者の中には仏教の真理を理解している人が少なからずいるのです。無学な宣教師たちは、その教えを訳も分からずに信じて、しきりに真理の原理に背き、常に反する教法を説き、あなた方の中に入って、ただこれを盲目的に信じる事を求めている。私たちは、今や滅びようとしているこのキリスト教を信ずる必要は全くないのである。願わくば、私たちが

愛理者之殷鑑

古来より信じている高遠な教義に従つて欲しいのです。仏教の道理は完全であります。心の内奥における人類最高の希求を満足する宗教は、決して他に求めることは出来ないでしょう。今、西洋諸国においては、新しい宗教を求めようとしています。西洋諸国の国民に、私たちの宗教のもつ真理を知らせることは真まことに私たちの責任ではありませんか。私たちは、欧米の東洋学者の研究に感謝しなくてははいけません。彼らの努力によつて、仏教哲学の一部はヨーロッパの数カ国語に翻訳されました。私たちは自分たちの宗教の真髓を欧米の人々に教えていこうと思つています。そして欧米人が仏教の深遠な教えを受けとつてくれる事を願つています。イギリス人やアメリカ人がキリスト教の為にしたように、あなた方は仏教の為にすべきなのです。みなさん、互いに協力し、一致団結して彼の至仁なる釈尊の教えを全世界に広めようではありませんか。

愛理者之殷鑑

親愛なる同胞諸君。私は病魔に侵されて、皆さんに直接お会いしてお話出来ないのが残念でなりません。しかし、私はあなた方を深く深く思っています。切に願わくば、仏教の教えに従って、純淨潔白の行いを勤め、決して仏陀・釈尊の伝えた宗教を捨てることありませんように。あなた方の愛する子供たちを教育する時には、仏陀の教えをもつてするのを忘れませんように。仏陀は必ず、あなた方を棄てることはありません。

愛理者之殷鑑 いんかん
終

愛理者之殷鑑

明治二十二年四月十三日印刷
明治二十二年四月十五日出版

定価 金七錢

訳者

川上貞信

熊本県天草郡佐伊津村一千二百六十三番地

当時寄留下京区第二十九組大工町六十二番戸

本願寺大学林内学院

京都市下京区三条通富小路東入十七番戸

兼印刷者
発行者

今井喜兵衛